設立30周年を祝って

中 谷 伸 生
（関西大学名誉教授・本会顧問）

芸術学美術史研究学会設立30周年をお祝いさせていただきます。この学会は、通称「七夕会」と呼ばれてきましたが、毎年7月7日に織姫と彦星が天の川を渡って出会える日に因んで命名されました。つまり、関西大学芸術学美術史専修（設立当時は美学美術史専修）の大学院を修了した卒業生を中心に集まる同窓会的な会合として毎年7月に開くという趣旨でした。私が発起人となって設立されたと言われていますが、当時、笠岡市立竹喬美術館に勤務していた上薗四郎さんあたりから、同窓会をつくって欲しい、という強い要望が出まして、卒業生の中で最年長者の私が設立に関わり、七夕会の設置が決まったと記憶しています。もともと関西大学の哲学科の中にあった美学美術史専修が、その後に独立した専修となり、さらに文学部の組織改革が行われ、専修名称の変更がなされ、芸術学美術史専修となり、その名称を用いて本学会が今日に至っています。

その後も七夕会は順調に開催され続け、今や80名を越える会員を抱える組織となりました。基本は「同窓会」でしたが、若い研究者の業績をつくるという趣旨で、やがて「学会」の名称が付けられました。2018年からは「eジャーナル」の発刊も始まり、いよいよ堅固な体制が確立したように思います。ただし、私としましては、「学会」であることは良いことだとは考えますが、いつまでも「七夕会」という同窓会的な雰囲気を捨てずに、和気あいあいとした親睦の会合であって欲しいと願っています。もちろん、関西大学の卒業生に限らず、他大学の方でも、入会の希望があれば受け入れるという開かれた組織を目指すという理想を忘れないように運営すべきだと思います。80数年にもわたって大阪で活動した画家の菅楯彦（1878－1963）は、大阪という所は「他郷の人をも容れて吝ならず」と語っています。大阪にある関西大学の芸術学美術史研究学会も、そういう開かれた精神を受け入れて、人々の交流の輪を広げてゆければ、それが何よりの文化貢献になるにちがいありません。

新しい時代に向けて、芸術学美術史研究学会がさらなる発展を遂げることを心から願ってお祝いの言葉といたします。

「七夕会」創立 30 周年―これまでとこれから

平 井 章 一
（関西大学教授・本会代表）

「七夕会」は、1991 年 7 月 20 日、関西大学大学院出身の学芸員の懇親を目的に創立されました。関西大学大学院に美学美術史のコースが開設されたのは 1970 年のことですが、いま思えば「七夕会」が創立された 1991 年は、その修了生を中心に、関西大学出身の美術館・博物館の学芸員のネットワークが徐々に出来つつあった時代でした。

それから 30 年を経た現在、会員の活躍の場は東北から九州、さらには海外まで広がり、職種も美術館・博物館の学芸員だけでなく、文化施設や文化行政機関の専門職員、修復家、大学教員など、多岐にわたっています。また、2014 年に学会と称するようになって以降は、うれしいことに他学出身者の入会希望も増えてきました。この発展は毎回の例会幹事の方々や当時の教員のご尽力の積み重ねがあってのことであり、代表として厚く御礼を申し上げます。

2020 年の幕開けとともに始まったコロナ禍で、同年 7 月の総会や研究発表会、懇親会は中止せざるを得ず、「七夕会」創立 30 周年を迎えた本年も状況が好転しないまま、研究発表会だけはなんとかオンラインで開催したものの、懇親会は行えませんでした。記念のイベントを考えていただけに大変残念でしたが、思いがけず本会が 30 年かけて培ってきた交流の輪、会員間の絆を再確認することもできました。2020 年の春学期、関西大学総合図書館はもちろん地域の公共図書館が軒並み休館し、卒業論文準備中の学生が資料収集に苦慮する中、私の協力依頼に応じて多くの会員の方々がお仕事の合間に職場の資料をコピー、スキャンしてお送りくださったり、貴重な蔵書を惜しみなくお貸しくださったのです。これはイベントなどよりもずっと、創立 30 年の記念となる出来事だったといえるかもしれません。

来年からはコロナ禍の収束後を見据え、運営委員会を設置して、より活発な交流の場、研鑽の場を目指していきますので、今後とも引き続きどうぞよろしくお願い申し上げます。